

僕の父（ヘミングウェイ）

妻には死なれアメリカでは「何もかもだめになつちやつ」たので、騎手のバトラーは息子のジョーとイタリアに渡り障礙レースに出て暮しを立てるが、太る體質だから體重を落すのに苦勞した。しかし、繩跳びで大汗を掻くその姿が見るからに楽しく、ジョーは心底父が好きでならなかつた。

だが、殆ど毎日レースに出る父は疲切つてゐた。或日、レースを制した直後、彼はミラノのカフェで二人の男に責立てられて、黙込んでゐた。ジョーが近寄ると、一人が「ふざけた野郎だ」と云つて立去つた。父にそんな事が云へる奴がゐるなんて、とジョーは驚くが、世の中には辛抱しなきやならん事が澤山あるのさと、蒼い顔をして父は云つた。

三日後、二人はフランスに移つた。二人でサンクルーでの大きなレースを見物に行つた時、こんな事があつた。大本命はツァーといふ名馬で、騎手は父の友人のガードナーだつたが、出

走前、騎手の更衣室で、父は誰にも聞かれぬ様にガードナーに顔を近附け、「どれが勝つ？」と訊くと、相手は「カーカビンだ」と答へた。人氣の低い馬だったが、父はそいつに大きく賭けた。レースが始り、先頭を走るカーカビンをツアーが直線距離で猛然と追上げたが、結局、カーカビンが僅差で勝つた。凄いレースだと興奮するジョーに、父が「妙な目つき」をして云つた。ガードナーは大した奴さ、ツアーをわざと負けさせるなんて、名手でなきや出来やしない。ジョーの興奮はすっかり醒めて仕舞つた。大金をせしめた父はバリのカフェで大酒を飲み、太り出してレースにも出なくなつたが、息子には、「いづれひと財産拵へたら」、お前はアメリカに戻つて學校に行けと云つた。

やがて父はツアーに劣らぬ駿馬しゅんばを買つた。調教師と騎手を自分で兼ねれば「すごくいい投資になる」と考へたのだ。最初のレースで三著になると、父はいかにも嬉しさうで、以前と違つてとても興奮してゐた。「自分自身のためにレースに出る」と、こんなにも變るものなのだ。處が、二度目のレースの日、父は先頭を走るが、障礙を越えた途端、他の馬と衝突して轉倒し、馬の下敷きになる。擔架ダンカで運込まれた時、父はもう死んでゐた。ジョーは泣き續けるが、場外で救急車を待つてゐると、男達の話す聲が聞えた。「いい氣味だ」、「自分で八百長を仕組

んだんだから、自業自得つてもんだ」。傍にゐたガードナーが、耳を貸すな、親父さんは「素晴らしい男」だつたぞと云ふが、ジョーは思ふ。「ぼくにはわからなかつた。この世の中で、せつかく本氣で何かを始めても、結局、何もあとには残らないみたいだ」。

ヘミングウェイの處女短篇集「吾等の時代に」中の一篇である。ジョーは父が如何いかさま様師と判つても、やつぱり父が大好きで、「本氣で何かを始め」ようとする父を嬉しく思つた矢先に、父は慘死を遂げる。何とも救ひの無い話だが、この作品はヘミングウェイの「悲劇的人生觀の中心的構成要素、即ち、この宇宙の何ものかが吾々全てを打負かす、といふ考へ方の完璧な表現」であり、短篇集全體の「どん底の情調」の表現でもあると、アメリカの或る學者が書いてゐる。「自らの裡に悲しみよりも喜びを多く持つ人間は眞實ではあり得ない、もしくは未發達だ」とメルヴィルは「白鯨」に書いたが、ヘミングウェイもさう信じた。二十七年後、彼は名作「老人と海」に於て、何物にも打負かされぬ人間の無私のストイシズムの見事を描くが、それは人間の悲哀を知悉ちしした男の、人間肯定への眞摯な祈り以外の何物でもなかつた。

〔ヘミングウェイ全短篇一〕高見浩譯、新潮文庫